SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

MICKEY 17／ミッキー17

2025年／アメリカ映画
配給：ワーナー・ブラザース映画／137分

2025（令和7）年4月10日鑑賞　　Ｔ・ジョイ梅田

Data　２０２５－３７

監督・脚本・製作：ポン・ジュノ
原作：エドワード・アシュトン『ミッキー７』（早川書房）
出演：ロバート・パティンソン／ナオミ・アッキー／スティーブン・ユアン／トニ・コレット／マーク・ラファロ

みどころ

『ミッキー17』ってナニ？原作小説の『ミッキー7』をポン・ジュノ監督流の想像力でさらに膨らませた奇想天外な「ＳＦもの」にビックリ！

３Ｄプリンターで建物が安く早く完成する今の時代、人体プリンティング（人体複製）は近い将来の現実だが、それにしてもエクスペンダブル（使い捨て人間）はヤバい。また、その世界ではマルティプル（重複存在）は厳禁だから、それに違反すると・・・？

『グエムル　漢江の怪物』（06年）のクリーチャーぶりに比べると、本作に見るニフルヘイムの先住生物たるクリーパーの出来はイマイチ。クライマックスにみる大激突も、違和感いっぱいだ。

すると、ポン・ジュノ監督5年ぶりの最新作は失敗作！？私はそう思ってしまったが・・・。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

▪□■『パラサイト』から５年。ポン・ジュノ監督の心境地は？■□▪

ポン・ジュノ監督は、『パラサイト　半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）で、第92回アカデミー賞の作品賞、監督賞、脚本賞、国際長編映画賞の4部門を受賞し、「非英語作品としての作品賞受賞は史上初」という改挙を成し遂げた。同作は韓国においてとりわけ顕著な“格差社会”に注目した超問題的作として世界中の注目を集めたが、彼を一躍有名にした、「いかにも、これぞ韓国映画！」という『グエムル　漢江の怪物』（06年）（『シナマ11』220頁）は面白かったし、ポンジュノ監督特有の壮大な世界観を“売り”にした『スノーピアサー』（13年）（『シネマ32』234頁）も面白かった。

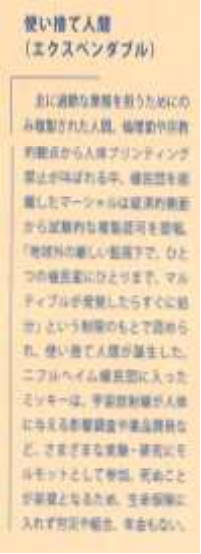
そんな彼の5年ぶりの新作は、エドワード・アシュトンの小説『ミッキー7』を原作とし、監督自身がそれを『ミッキー17』に膨らませて脚本を書き、監督した映画らしい。私の子

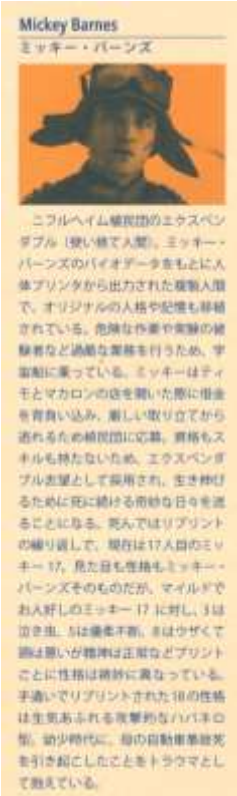
供時代には、漫画の『鉄腕アトム』や『鉄腕28号』を代表とする「ロボットもの」「SFもの」が有名だったが、「ミッキー17」って一体ナニ？

■□■ミッキー17とは?エクスペンダブル（使い捨て人間）とは?■□■

私が中学高校時代に学校推薦映画として観た『十戒』(56年）や『ベン・ハー』(59年)、『エル・シド』(61年）等は、1950年代に次々と製作されたハリウッドの「大型史劇（エピック)」だった。そして、チャールトン・ヘストンはそんな大型史劇にふさわしい、ハリウッドを代表する俳優だった。そんなチャールトン・ヘストンが猿の奴隷とされ、ふんどし姿（?）でスクリーン上に登場した「SFもの」大作として登場した『猿の惑星』(68年)が世界に与えたショックは相当なものだった。「SF モノ」にはさまざまな（科学的）前提が置かれているので、それを約束ゴトとして認めた上で鑑賞する必要があり、それは本作も同じだ。

しかして、本作のパンフレットには「CHARACTERS & KEYWORDS」があるので、これは必読。そのすべての紹介はできないが、まず「使い捨て人間（エクスペンダブル)」と「ミッキー・バーンズ」を紹介すれば、は次の通りだ。





■□■記憶移植とは？人体プリンティング（人体複製）とは？■□■

エドワード・アシュトンの原作小説をさらに壮大な「SF モノ」に広げた上、主人公も「ミッキー7」から「ミッキー17」に格上げ（？）した本作は、奇想天外なストーリーが次々と広がっていく。その内容は、「INTRODUCTION」で、次の通り紹介されている。すなわち、

> 人類発展を使命に掲げる巨大企業の下、主人公のミッキーは、命を落としては新たな身体で何度も再生する究極のミッションに就くー実は契約書をよく読まなかったため、結果的に開発チームの先鋒として、そして人類の先鋒として、前人未到の氷の惑星で、異常で危険な冒険に巻き込まれていく・・・。

また、そのストーリーは観てのお楽しみだから、パンフレットにおける本作のストーリー紹介は、次の通り簡単なものだ。

> 主人公は、人生失敗だらけの男“ミッキー”（ロバート・パティンソン）。一発逆転のために申し込んだのは何度でも生まれ変われる“夢の仕事”、のはずが……。よく読まずにサインした契約書は、過酷な任務で命を落としては、何度も生き返る究極の“死にゲー”への入り口だった！身勝手な権力者たちの指示で生命と労働を繰り返し搾取され、使い捨てられるミッキー。彼の前にある日、手違いで自分のコピーが現れてしまう。生き残れるのはひとりだけ……。そして事態は予想を超えた展開へ―ついにミッキーの逆襲が始まる！

しかし、このストーリーを理解するためには、前記 2 つのキーワードのほか、次のキーワードの理解も不可欠だ。すなわち、

記憶移植

人体プリンティングの要。オリジナルの人物の記憶や人格など“意識”をデータ化し、忠実に再現された肉体にインプットすることで完全なる複製（リプリント）ができあがる。ただしデータ書き込み時の問題か、原料となる有機物との相性なのかは不明だが、その性格は個体ごとに微妙に違いが生じてしまう。意識データの記録は、特殊な溶液でオリジナルの人物の記憶を蘇り起こしてデジタル化。膨大なデータ量になるため当初は冷蔵庫のように大きなドライブが必要だったが、研究開発が進められA4サイズほどのカートリッジにまで小型化された。

人体プリンティング（人体複製）

フルスキャンしたバイオデータに基づき、人体プリンタでオリジナルの人物と同じ肉体を再現するテクノロジー。原料はサイクラーで濾過された有機廃棄物で、それを人体プリンタから出力する。一体にかかる出力時間は 20 時間以内。人体プリンタはCTスキャン装置と同程度のサイズのため、この出力装置とバイオデータさえあれば場所を選ばず、何度でも同じ肉体がリプリントできる。

人格バックアップ

意識データの定期保存。ヒトの意識は経験を通して日々アップデートされるため、記憶の連続性を保つためエクスペンダブルは週 1 回データのバックアップを行う。リプリントの際には、最後にセーブされた最新の記憶や人格がインプットされる。

■□■ニフルヘイム植民団のリーダーは？その妻は？■□■

『宇宙戦艦ヤマト』（77 年）シリーズでは、宇宙戦艦はもとより、ガミラス帝国やイスカンダル等のキーワードの理解が不可欠だった。また、『スター・ウォーズ』（77 年）シリーズでは、「遠い昔、遥か彼方の銀河系」という壮大な世界観と、そこを舞台とした、人間と多くの種の異星人（多くの場合はヒューマノイドたち）のキャラの理解が不可欠だった。

それに対して本作では、未だかつて誰も聞いたことのない、「ニフルヘイム植民団」なるものが登場する。このニフルヘイム植民団のリーダーがケネス・マーシャル（マーク・ラファロ）だが、そのキャラと能力は？また、『ヒトラー～最後の 12 日間～』（04 年）（『シネマ 8』292 頁）で観たとおり、1945 年 4／30 に最後の日を迎えたヒトラーは、その直前にエヴァを新妻に迎えていたが、ケネス・マーシャルには、贅沢好きの典型的なセレブで、マーシャルを心から愛しているが、何よりも権力者の妻の座にいるのが大好きな妻イルファ（トニ・コレット）が常に付き添っているので、そのキャラと能力にも注目！

しかして、ケネス・マーシャルとイルファのキャラは、次の通りだ。

Kenneth Marshall
ケネス・マーシャル

ニフルヘイム植民団のリーダー。元議員で 2 度にわたり落選した後、政界復帰に見切りを付けてニフルヘイムでの新たな王国作りに意欲を燃やす。ナルシストでカリスマ性を持ち合わせ、派手なジェスチャーを織り交ぜた歯切れよいスピーチで植民団の若きクルーを魅了。ニフルヘイムへの移動中は "スイートルーム" で何不自由ない日々を送り、抽選で選ばれたクルーを部屋に招いて豪華な食事を振る舞う「今月ディナー」を開催した。強いリーダーシップの持ち主に見えるが、実は後ろ盾の支援団体であるプロテスタント系教団員の組織やイルファにいいようにコントロールされている様子。

Ylfa
イルファ

マーシャルの妻。贅沢好きの典型的なセレブ。マーシャルを心から愛しているが、何より権力者の妻の座にいるのが好き。つねに夫に寄り添い、リスペクトやフォローをしながら意のままに操っている。料理にうるさく、中でもソースに強いこだわりを持っておりオリジナルソースの研究を欠かさない。

■□■植民計画とは？ニフルヘイムとは？クリーパーとは？■□■

続いて、ケネス・マーシャルが計画している「植民計画」、そして地球から 4 年半の航行時間を要するとされているニフルヘイムの解説は、次の通りだ。さらに、ニフルヘイムに

は先住生物のクリーパーが住んでいるらしいが、その解説は次の通りだ。

植民計画

他の惑星への移住計画。その目的は、領土拡張より環境破壊が進む地球からの脱出の意味合いが強い。マーシャルが推進したのは、氷の惑星ニフルヘイムを目指す「ニフルヘイム植民計画」。植民団の募集には、野心家や理想主義者など理念を持った者たちのほか、マーシャルを信奉する支持者や貧しさから逃れようとする生活困窮者、多額債務者たちも押し寄せた。

ニフルヘイム

ニフルヘイム植民団が目指す入植地。地球から4年半の航行時間を要する。雪と氷に覆われた惑星で、地底の洞窟などにはクリーパーが棲息している。大気には地球人に有害なウィルスが含まれているが、ミッキー12～16の犠牲によってワクチンが開発された。季節があるようで雪解け後には豊かな土壌が顔を出し、作物の栽培も可能。

クリーパー

ニフルヘイムの先住生物。成長段階に合わせ、ベイビー、ジュニア、長老はママと呼ばれる。地底の洞窟などで群れを作って棲息している。節足動物のように体はいくつもの体節に覆われ、12本の足で這うように歩く。後ろ足2本で立ち上がったり、高速で走り回ることも可能。口は複数の牙が開く2重構造で、中から細長い器官が伸びる。体長は2～3メートルほどだが、ママは他の個体より大きい6メートル。言語を操り名前で呼び合うなど高い知能の持ち主で、翻訳機を通すことで地球人との会話も可能。ママのもと掟に従って暮らしている。性格は温和で好奇心旺盛。とつぜん現れた地球人に接することなく近づいたことから、捕食者と誤解されてしまう。集団で高音の鳴き声をだすことで、相手の眼球を破裂させ、鼓膜を破り、脳も破壊することができるというが、実際に確認した者はいない。

■□■マルティプル（重複存在）は厳禁！ああ、それなのに？■□■

本作を理解するためには、第１に前述した「記憶移植」、「人体プリンティング（人体複製）」、「人格バックアップ」の理解が不可欠。そして、第２に「マルティプル（重複存在）」（は厳禁）というルールの理解が不可欠だ。「CHARACTERS & KEYWORDS」はそれについて次の通り解説している。

マルティプル（重複存在）

複製された同じ人間が同時に複数存在すること。マルティプルが発生した場合は、オリジナルを含めデータともども廃棄される。ゴシップ誌の記者が、自身を複製して逮捕された殺人犯アラン・マニコバを恐怖と嫌悪を込め「マルティプル」と誌面に記したことから定着した。

しかるに、本作ではミッキー17が死んでしまったと“誤解”したことによる、ミッキー18の誕生によって、マルティプル（重複存在）状態になってしまった本作中盤から、あっと驚く、奇想天外な物語に移行していくので、それに注目！

そこでのポイントは、“防御的な性格”だったミッキー17に対して、ミッキー18はそれとは真逆の“攻撃的な性格”だということだ。本作で、ある意味、ミッキー17以上の存在感を発揮するのが、ニフルヘイム植民団のエリート・エージェントで、船内では兵士、警官、消防士の役割を担っている女性ナーシャ（ナオミ・アッキー）だ。ナーシャはミッキー1が初日に食堂で出会った女性だが、2人はすぐに意気投合し、4年半の航行を経て17回も生まれ変わったミッキーのソウルメイトとして多くの時間を共有し、ベッドでも濃厚な“セッション”を繰り返すことに。また、ナーシャは自分の気持ちに率直で、思ったことをすぐに行動に移すタイプで、性欲も旺盛だから、ミッキー17が死ぬ前にミッキー18がリプリントされたことを知ると、こんなチャンスはめったにないと3人でのプレーを提案するほどだからすごい。ポン・ジュノ監督が原作をさらに膨らませて作り上げた、SFモノたる本作の“奇妙さ”は想像以上で、違和感も大きい。しかし、本作中盤では想定外のマルティプル（重複存在）状態になったミッキー17とミッキー18の間に立つ女性ナーシャの存在感と役割がメチャ大きくなるので、それに注目！

■□■クリーパーとの死闘はイマイチ！本作は失敗作？■□■

人間がはじめて月に上陸した時のニュースに全世界の人々が喜んだが、本作に見るケネス・マーシャルが指揮する植民団のニフルヘイムへの入植は全人類が期待したものではない上、先住生物のクリーパーにとっては迷惑至極なもの。いわば、アメリカ大陸という“ニューワールド”へ白色人種が入植した時に、原住民たちが受けた迷惑千万さと同じようなものだ。他方、ポン・ジュノ監督の『グエムル　漢江の怪物』では、グエムルのクリーチャーぶりが大きな話題となり、それが同作大ヒットの原動力にもなったが、本作に見るクリーパーのクリーチャーぶりはイマイチ！

しかして、本作ラストのクライマックスでは、ニフルヘイムに到着した後、ケネス・マーシャルの言動に疑問を抱き始めたナーシャが、ミッキー17、ミッキー18への対応やクリーパーへの対応にハチャメチャな姿勢を示すケネス・マーシャルに対して、ついに反旗を翻すことになるので、その展開に注目！もっとも、本作のそんなクライマックスは大きな感動を呼ぶものとは程遠いもので、違和感いっぱいだから、アレレ、アレレ・・・。そのため、残念ながら本作のクライマックスにおけるクリーパーとの死闘ぶりに感動することはできず、残念ながら本作はポン・ジュノ監督の失敗作？私はそう思わざるを得なかったが・・・。

2025（令和7）年4月16日記